

プラネタリウムと私

小林悦子*

昨秋、京都での天文学会中、京大の学生さんたちと話す機会があったが、子供の頃に東京の五島プラネタリウムをよく見たという人がいて、驚くと同時に、もうずいぶん長いこと解説をやっているなあと、今更ながらひそかに感慨を新たにしたものだ。

渋谷の繁華街の真中に、天文博物館五島プラネタリウムが開館してから14年を過ぎた。当初から解説しているのは、頭が太陽で顔が満月（自称）の水野学芸課長以下、4名である（キラ星の如くに後に続かないのが残念だが、現在は新人も加わって7名いる）。

天文学普及のために日夜努力をしている（何とキザな言葉か）わけで、プラネタリウムで星を投影しての解説が、まず何といっても第一番の仕事であるが、展示品その他に関する仕事も相当に多い。そして仕事の大部分は自己の天文知識が土台となるので、基礎はもちろん新しい知識の吸収を怠るわけにはいかない。

当館の投影は一般投影と特別投影とに大別される。前者は休日の子供から大人まで誰でも入場したような場合で、後者はつぎのように時間と入場者を限って実施される。子供天文教室、星の会の講演会（小・中・一般の3クラス）、高校天文教室、天文教養の夕べ、星と音楽の夕べと、いう毎月の定例のもと、年間を通じて適宜に実施する、幼稚園アワー、天文講座、また学校団体に対しては学年別解説や、希望されるテーマに対しての解説というように、豊富なメニューが揃えてある。このうちごく少数のものを除いて、すべて私たち解説員がその任にあたる。

天国への階段を昇る（解説台に入る）と、あとは約1時間、星の下での独演である。幼稚園児や小学生の騒ぐ場合などはおだてたり叱ったりしながら、両手はプラネの操作スイッチを入れたり切ったり、マイクのボリュームに気をつかい、スライドのピントを調整し、必要があればポインターで星を指しつつ解説を進めていく。口八丁、手八丁、足はさほどつかわない。

休日などは、500名以上もの超満員、ドームという密室内で、たった一人で大きさにいえば命を預っているようなもの、もし事故でも起こったらと、時にふと怖くなったりするときもある。ある時は解説中に地震があり、天井の星々が東西南北にデタラメな動きをし、すぐく気持の悪い思いをしたこともある。

さまざまな訪問者に応ずるのも仕事の一つ、珍らしい

* 天文博物館五島プラネタリウム

天文現象があったり、問題が起ると、マスコミ関係者がやってくる。また全国の同様施設からの訪問見学者も多い。さらにしばしば悩まされるのは質問者である。こちらの都合など一向に考慮せず、2時間も3時間も問答をつづける中学生の相手をしていると、カウンセラーにでもなったような気がする。また電話で月の満ち欠けや天体写真の写し方などをきいてくる教育ママにも閉口する。手紙での質問も多い、その場合返信料は98%位同封してない。しかし館の方針のできる限り答えているがすべて返信料は持ち出しというわけ。御礼状はきたこと皆無。こんなにサービスする必要があるかしらと時には疑いたくもなるが、ハガキ1枚で、この神秘的な宇宙がわかると(?)思っている人に、わからないということをお知らせしようと、つつい返事を書いてしまう。

解説や展示のため、天体写真などの資料を集めたり、特別投影のプランを立てることも重要な仕事である。このために天文台をはじめとする種々な研究機関の先生方をお願いしたり、米・ソ大使館に足を運んだり、新しい出版物を見落さないよう、日頃から全員が注意するようにしている。資料は投影に使用できるようにスライドに作成したり、展示したりし、その整理もなかなか大へんである。

また永続的な大きい展示品は、業者に依頼するが、設計や製作段階でのチェックを行ったり、入館者に配布するパンフレットの作成も、毎月のこととて忙しく、追われているうちに14年以上を経てしまったという次第である。

解説員はそれぞれ個性が強く、解説以外の仕事は可能なものは分担してやっている。

星と音楽の夕べを担当すると、終日プレイヤーの前で選曲に頑張るときもある。小規模とはいえ、放送局ならば、製作、脚本、演出、舞台装置、アナウンスなど各専門家のやることを、ここではすべて自分一人でやるのである。考えてみると、まがりなりにもよくやれるものだと、我ながら感心する。

また、天文講座などに、例えば天文台の先生などをお願いする場合は、気持よく講演していただけるようにと、連絡や準備に心をくばる。

本誌にご執筆の先生方のなかにも、日頃、お世話になっている先生が多いので、誌上をお借りして、お礼申し上げますと同時に、今後とも御指導、御協力をよろしくお願ひ申し上げます。